

ソーシャル・エコロジー  
カリフォルニア大学における制度化と  
1960-70年代の歴史的文脈

Social Ecology: Its Institutionalization at the University of California within the Historical Context of the 1960s-1970s

小塩 和人  
Oshio Kazuto

**Abstract**

The purpose of this research note is to locate the process of establishing Social Ecology Program at the University of California in the historical context, particularly that of the late 1960s and early 1970s. It argues that the multidiscipline of social ecology evolved from the combination of social and intellectual forces that produced efforts to make the university enterprise more sensitive to non-academic needs and difficulties. For example, as Arnold Binder, the founder of the program, argued, “the universities’ sensitivity to the inner city and the disadvantaged resulted in human service curricula. When the sensitivity was in terms of environmental deterioration, the response was the environmental studies curricula.” While these two were thought to be mutually exclusive, the program in Social Ecology at the University of California, Irvine proposed curricula encompassing features stemming from both of these directions.

The program was started in January, 1970 for the explicit purpose of providing direct interaction between the intellectual life of the university and the recurring problems of the social and physical environment. Since it was founded on the conception of man as biological organism in a cultural-physical environment, the orientation was multidisciplinary. In other words, the program emphasized all knowledge and methodol-

ogy associated with the relationship of man and the environment in an ongoing interactive process. Furthermore, the curricula of the program were organized by problem area, not by discipline or academic subject matter. The curricula were oriented toward producing coordination between on- and off-campus experience, theoretical and applied learning, so that each would enhance and enlarge the other. Thereby the program would enable students to work effectively on community problems in a variety of contexts while simultaneously meeting the central goals of a university education. It was indeed a case of an academic border transgression in the 1960s and the following decades.

本研究ノートの目的は、1970年にカリフォルニア大学アーバイン校 (University of California, Irvine: UCI) でソーシャル・エコロジー・プログラム (Social Ecology Program: SEP、後に学部 School of Social Ecology: SSE) が創設された歴史的要因を、便宜的に組織・個人・社会的要因に分類して、整理することである。議論の順序としては、簡単な研究史の課題を整理した上で、まず SEP がカリフォルニア大学建学の精神といかに関係しているのかを検証し、つぎに誰が SEP 創設にどのように関与したのか、そして 1960 年代に展開した多様な社会運動と SEP 創設とが関連していた事を示唆したい。

そもそも 1970 年は、国家環境保護法 (National Environmental Protection Act: NEPA) の成立、環境省 (Environmental Protection Agency: EPA) の設立、全米で約 2000 万人が参加したといわれる第一回アースデーの開催など、1960 年代後半から蓄積された環境運動がひとつの頂点を迎えた歴史的転換点である、と言われている。事実、1970 年に全米に先駆けてカリフォルニア大学サンタバーバラ校で環境史の講座を開講したロデリック・ナッシュは、当時を回想して「この年の最初の数ヶ月で最高潮に達した環境に対する責任を巡る危機に私は対応しようとしていたのだ」と述べて、1970 年がいかに 60 年代後半の歴史的潮流の上に位置したのかを明言している。<sup>1</sup> にもかかわらず、一方でこれまでの 1960 年代研究者はこれら

---

1 Roderick Nash, "American Environmental History: A New Teaching Frontier" *Pacific Historical Review* 61 (1974), p. 363.

の出来事について歴史的な文脈の中で分析を加えることなく、また他方で環境史家は19世紀から20世紀半ばに展開した自然保護や資源保全に注目するか、あるいは第二次世界大戦後の新しい環境思想や運動を60年代という文脈の中に置いて理解しようとしてこなかったのである。<sup>2</sup>

一般的な理解では、第二次世界大戦の終了を境にして、それまで支配的だった功利主義的な資源保全は、質的な環境つまりアメニティの問題へと変っていった、とされている。別の言い方をすれば、それまで美しい景観や娯楽を目的として保護すべき対象をみていたのが、人間を含む生態系全体が健やかであるか否かが新たに問題となった、というのである。この変化を物語る一つの指標として、たとえば「保全 (conservation)」という表現に替わり「環境主義 (environmentalism)」が頻繁に使われるようになった。加えて「生態系 (ecology)」という言葉も多くの人々が使うようになった。たしかに、一般的には生き物とそれを取り巻く環境との相互関係性を意味する「エコロジー」は厳密な定義が難しい。

そこで問題となるのは、1960年代に何故このような運動が勃興したのか、という点であろう。アメリカ社会においてエコロジー的な考え方が浮上した一つの原因が、伝統的な考え方や価値観に意義を唱える「抵抗文化 (counter-culture)」にあったとされる。たとえば、伝統的なアメリカニズムが経済的成長、個人主義的競争、物質的豊かさに力点を置いていたとするならば、新しいものの見方は、安定、共同体、シンプリシティを強調していた、ということができよう。ただし、伝統的なアメリカニズムを具現するような権力エスタブリッシュメントですら、1960年代後半には人間と自然環境の「健康」とがと深く結びついている事を認識しつつあった点

2 たとえば Adam Rome, “‘Give Earth a Chance’: The Environmental Movement and the Sixties” *Journal of American History* 90 (2003) の指摘するところによれば、以下の60年代史研究書に環境は触れられていないという。Todd Gitlin, *The Sixties*. New York, 1987; David Farber, *The Age of Great Dreams*. New York, 1994; David Steigerwald, *The Sixties and the End of Modern America*. New York, 1995; David Burner, *Making Peace with the 60s*. Princeton, 1996; David Chalmers, *And the Crooked Places Made Straight*. Baltimore, 1996; Howard Brick, *Age of Contradiction*. New York, 1998; Dominick Cavallo, *A Fiction of the Past*. New York, 1999; Maurice Isserman and Michael Kazin, *American Divided*. New York, 2000. ただし、例外的なのは、Edward Morgan, *The 60s Experience*. Philadelphia, 1991; James Patterson, *Grand Expectation*. New York, 1996 の二冊だという。また1960年代と環境との関連性を示唆する最新の研究については、Firis Dunaway, “Gas Masks, Pogo, and the Ecological Indian: Earth Day and the Visual Politics of American Environmentalism” *American Quarterly* 60 (2008) も参照。

は見逃してはなるまい。

多少乱暴にまとめてしまうならば、恐怖こそが新しい環境主義を結晶化させた、と捉える事ができよう。かりに古い恐怖が、人間にとって有用な資源がなくなってしまうという恐怖だ、ということならば、それは20世紀初頭の革新主義時代やそれに続くニューディール時代の科学的・功利主義的保全運動の根底にあるものだった、と言えよう。それに対して、第二次世界大戦後に立ち現れた新しい恐怖とは、さしずめウィリアム・ヴォグトが表現しているように、もしも高度に発達した科学技術文明が、気をつけないと生態系全体を破壊してしまう恐れがある、というものであった。人類の未来を危険にさらすような発展には疑問符がつけられた。さしずめ、従来は汚染が人間社会の経済発展を象徴するものであったのに対して、新しい歴史的文脈では汚染こそ人間の存在基盤である生態系全体に悪影響を及ぼすものである、とする認識が主流化したのである。<sup>3</sup>

I

さて、カリフォルニア大学アーバイン校 (University of California, Irvine: UCI) 社会生態学部 (School of Social Ecology: SSE) のホームページには以下のような文言がある。<sup>4</sup>

社会生態学部は学際的な学術単位であり、その研究と教育は社会科学、行動科学、法学、環境学、衛生学における知識にもとづき、それらの領域を豊かにもしている。本学部には次の4学科がある。犯罪・法・社会、環境衛生・科学・政策、心理学・社会行動、計画・政策・デザイン。本学部の教員は、科学的方法論を、さまざまな社会、行動、環境上の問題解決に応用している。長年に渡って本学部が取り組んできた課題には、犯罪と正義、人間発達における社会的影響、物理的環境の人間行動への影響などがある。生態学が生物と環境との関係性について注目するのに対して、社会生態学は人間と環境との関係性に着目するものである。

3 William Vogt, *Road to Survival*. New York: William Sloane Associates, 1948.

4 <http://www.seweb.uci.edu/index.uci> を参照。

2005 年度において、71 名の教官、3204 名の学生（うち 2960 名の学部生）を擁する SSE が誕生したのは、1970 年 1 月。1 名の教官と 20 名の学部生からなる SEP として歴史的第一歩を踏み出した。それが過去 30 年間で、教官数が 70 倍、学生数が 160 倍に急成長し、さらにプログラムは学部昇格したのである。

話を先取りしておく、SEP の創設準備は、1960 年代後半、アメリカにおける高等教育機関が社会的養成にこたえようと、組織改変していく動きの中で起った。後述するように、UCI の大学当局ならびに評議会 (Academic Senate) に対して正式の提案がなされたのは 1969 年のことであった。提案から承認までの一年間で明らかになった事の一つに、当時の大学における学部教養教育と専門実学教育との確執があった。つまり、社会問題の解決という実学指向性は、工学・法学・医学を除き、カリフォルニア大学の建学の精神である学部教養教育と相容れない部分があったのである。

そもそもカリフォルニア大学 (UC) は、1868 年ランド・グラント大学として発足した。カリフォルニア州政府と私立カリフォルニア大学との間の合意に基づき、オークランドとその北側にある土地と建物が後者から前者に移譲される形で始まった。オークランド北部地域は、バークレイと命名されて 1873 年にキャンパスが移転し、本部だけがオークランドに残された。その後、サンフランシスコの医学校が UC に寄付され、1958 年までにバークレイとサンフランシスコに加えて 4 つのキャンパスが新たに創設され、学生総数も 4 万 4000 人と増えた。当時、20 年間で学生数がさらに 3 倍増える見通しが立っていた。そこで、拡大を続けるカリフォルニア州では、UC とは別に州立大学 (California State University: CSU) と州立短期大学 (Community College: CC) の増設計画が進められた。<sup>5</sup>

1960 年、ドナヒュー高等教育法がカリフォルニア州議会を通過し、これにパット・ブラウン州知事が署名することで、新たに三つの UC キャンパス建設が承認された。そして、オレンジ郡のアーバイン社から 1000 エー

5 1957 年にはクラーク・カー UCB 学長が UC 総長に任命され、1967 年までの任期を全うした。Clark Kerr, *The Gold and the Blue: A Personal Memoir of the University of California, 1949-1967*. Berkeley: University of California Press, 2001; Dean C. Johnson, *The University of California: History and Achievements*. Berkeley: University of California Press, 1996; Patricia A. Pelfrey, *A Brief History of the University of California*, Second Edition. Berkeley: University of California Press, 2004.

カー（同郡の約4分の1強の面積）がUCに新キャンパス予定地として寄付されたのである。1962年、農業化学を専門とするダニエル・オールドリッジが新しく創設されるUCIの初代学長に選ばれ、1963年に彼はカー総長に宛てた書簡の中で、学融合の必要性を強調していた。<sup>6</sup> 1964年にはキャンパス奉納式が、リンドン・ジョンソン大統領を招いて開催され、彼は「カリフォルニア州は、教育について語るだけではなく、行動を起している」と賞賛した。そして翌1965年に芸術、生命科学、人文学、物質化学、社会科学、経営学、工学の分野で第一期生を迎え入れたのである。<sup>7</sup>

1983年まで学長を務めたオールドリッジの教育哲学は、以下の文言に表れている。<sup>8</sup>

オールドリッジ学長は常にランド・グラント制度の中で人生を送ってきた。学長職を引き受ける前に、彼はUCのカー総長に対して、UCIを創設する際、比較的自由裁量を認めてもらう事で、21世紀になっても妥当性をもつような『ランド・グラント・モデル』に沿った形で進めたい、と語った。つまり、地元共同体のみならず、州、国家そして世界に対して奉仕する事ができるような新しいキャンパスを目指したのである。

オールドリッジの教育哲学は、後日SEPがSSEへと発展していく際につながる考え方で、といえよう。そもそもランド・グラント制度は1862年のモリル法によって制定された。1858年にバーモント州選出のジャスティン・モリル連邦下院議員が提出した法案が、4年後に成立した。それによると、各州選出の議員一人当たり3万エーカーの連邦公有地（land）を無

---

6 Jackie Dooley, ed. *Designing UCI*. Irvine: UCI Libraries, 2005, 8; Lewis Bird, Jr., “Not ‘Where It’s At,’ But Why It’s There” July 1973, Department of Special Collections and Archives, UCI Libraries [以下DSPCと略す].

7 Martin J. Schiesl, “Designing the Model Community: The Irvine Company and Suburban Development, 1950-88” *Postsuburban California: The Transformation of Orange County Since World War II*, eds., Rob Kling, Mark Poster, and Spencer Olin. Berkeley: University of California Press, 1991; Ann Forsyth, *Reforming Suburbia: The Planned Communities of Irvine, Columbia, and the Woodlands*. Berkeley: University of California Press, 2005; Dooley, *ibid.*, p. 34.

8 Samuel C. McCulloch, *Instant University: The History of the University of California, Irvine, 1957-93*. Irvine: University of California, undated, p. 19.

償で州に与え (grant)、とくに農業・機械技術・家政学教育の充実ならびに地方文化の向上をはかろうとした。その結果、1865~1890 年の間に、こうした実学指向の州立大学が新たに 16 創設された。そして 20 世紀になると、農学を越え、地元を越えて、より大きな社会的要請に応える高等教育を続けていく存立基盤となった。そして、SEP 創設が UCI 開学 4 年目に当たる 1969 年に提案されたのは、インディアナ大学 (Indiana University: IU) から移ってきた計量心理学者アーノルド・バインダーによるものであった。

## II

では、そもそも SEP がなぜ一人の心理学者によって提案されたのだろうか。それには大きく分けて個人的な理由と、社会的要因があったと考えられよう。アーノルド・バインダーは前任校の IU において、連邦助成金で実験心理学の研究室を運営していた。その当時を振り返って、地域の社会問題に対して大した注意を払っていなかった、と彼はいう。心理学の研究をはじめた頃に、臨床心理学に関心を持っていたのが、実学的な応用学間に近づいた唯一の時期であった、と回想している。それが、1967 年に一つ目の転機が訪れた。その年のアメリカ心理学協会の年次大会で、連邦公衆衛生局 (U.S. Public Health Service) の環境統制部 (Environmental Control Administration) の代表者から誘いを受けて、連邦予算を得て、事故予防の計量研究を始める事となった。これが、実社会における問題を解決するために自分の専門知識を応用した最初の事例だ、という。さらに、物理学者アン・サマーフィールドの誘いを受けて、個人からの寄付をもとに、生物学的気象学 (biometeorology) の研究も開始した。これは、気候が人間や動物に対してどのような影響を及ぼすのかを調査する領域であった。

他方、1960 年代の時代精神も彼をして SEP 創設に駆り立てた、とバインダー自身が振り返っている。1960 年代を「人道的な関心が広がり、多大な努力をともなって、生活全般を改善していこうとする時代だった」と表現している。たとえば、ケネス・ガルブレイス著『豊かな社会』(1958 年) が豊かさの影で大きい貧困が存在している事を摘発することで人々の意識を大きく変え、大統領フランクリン・ローズヴェルトのニューディール

精神を受け継いだジョン・F・ケネディのニュー・フロンティアや、彼を継いだリンドン・ジョンソンが貧困との戦いや公民権政策を「偉大な社会」プログラムの中で展開した事を挙げている。さらに、恵まれない人々のため連邦最高裁判所長官アール・ウォレンが尽くした例として、1967年のゴルト判決（Gault decision: 少年審判所における正当な法手続きを義務付ける判断）を挙げている。<sup>9</sup>

このような社会的弱者に対する感受性が、貧困者、マイノリティから環境劣化へと広がるのは時間の問題だった、とバインダーは考えている。その結果、全米規模の組織が環境問題の解決を目的とするようになった。たとえば、国家科学評議会（National Science Board）、国家科学財団（National Science Foundation: NSF）、アメリカ科学向上協会（American Association for the Advancement of Science: AAAS）、国家科学学術院（National Academy of Sciences: NAS）、社会科学協議会（Social Science Research Council: SSRC）などがある。NSBが「重要な社会問題に対して社会学の知識をどのように応用できるか、分析し提案するための」委員会を1968年に立ち上げた。<sup>10</sup> 同委員会は、翌年に報告書を世に問うた。報告書に盛り込まれた提案の一つが以下のように表現されている。<sup>11</sup>

本委員会は、今日の社会問題に対応するためには、社会科学の人材を活用し、大衆にとって重大な課題を考察する目的を明確化した応用社会科学研究ができるような新しい組織作りが要求されている、と考える。本委員会が提案するのは、社会的な課題を社会科学と他の領域の専門家が共同で問題解決に当るような特別の研究組織の形成である。工学をはじめとする専門職研究者が社会学者と協同しなければならない。彼らが持っている技術的な知識が、多様な社会問題の原因と解決策を考える際に必要不可欠となる。さらに、各々の研究組織は問題を抱える行政組織や集団と密接な関係を築くことで、研究組織の成果が選択肢の幅を広げ、政策の実行において

---

9 Arnold Binder, interview with the author, 14 August 2007.

10 The Special Commission on the Social Sciences, the National Science Board, *Knowledge into Action: Improving the Nation's Use of the Social Sciences*. Washington, D.C.: National Science Foundation, 1969, p. xi.

11 *Ibid.*, p. 87.



も役に立つ事が可能になるのである。

この文言は、科学と実社会の問題との関係が関心の的となり、その結果 NSF の中に応用科学についての組織が形成された事を意味している。1971年には、国家の難局に応える応用研究理事会 (Research Applied to National Needs Directorate) が組織された。NSF は、公募に基づく基礎科学研究を支援する一方で、科学者の共同体が国家的な問題に対応するような応用科学を推進するように、と一定の期待が高まっていたのである。

つぎに AAAS が1961年に創設した人道福祉促進科学委員会 (Committee on Science in the Promotion of Human Welfare) は、1970年代を通して活動を続けた。その一成果として、「社会的要請への科学の適応:知識、制度、行動」と称する会議が開かれた。この会議の目的は、科学と工学が社会の要請に直接、効率的に応えられるようにするための構造と相互作用を促す事であった。その結果、従来の「帰謬法的」研究よりも学際性と統合性が強調されるようになったのである。<sup>12</sup>

さらに、NAS と SSRC が協同で行動社会科学調査委員会 (BASS) を立ち上げ、行動科学と社会科学が直接社会に役立つよう働きかけた。以下に引用する本委員会の報告書こそ、1960年代の時代精神を映すものといっても過言ではなからう。<sup>13</sup>

いま我々は社会的危機の中で生活している。我々の都市や大学では暴動が起きている。誰も望まない戦争に出口が見えない。人口爆発が社会的制度を圧迫しつつある。高度に発達した技術は、その発達と結果を抑制しない限り、自然の美しさを破壊し、環境を汚染する。生物学や医学の分野でどれほど科学が進歩して、痛みを減らして命を長引かせたとしても、臓器移植、人の行動を変えてしまうよ

---

12 Richard A. Scribner and Rosemary A. Chalk, *Adapting Science to Social Needs: Knowledge, Institutions, People into Action*. Proceedings of a Workshop Conference on Problem-Oriented Research. Washington, D.C.: American Association for the Advancement of Science, 1977.

13 Behavioral and Social Sciences Survey Committee, *The Behavioral and Social Sciences: Outlook and Needs*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1969, p. 6.

うな薬、遺伝子操作など新しい問題が次々と浮上する。

BASSは、応用行動科学大学院（Graduate School of Applied Behavioral Science）を創設するよう大学に働きかけた。提言によれば、こうした大学院は、個々別々の学問分野から独立した学融合的な存在であり、他の科学分野からの教員を含む学際性を有し、研究の方向性ならびに現場で学ぶために地域の組織と密接な関係を持つ事が求められていた。問題解決のための応用性が一方で強調されるものの、科学的なモデルや理論構築も重要性を保持すべきだという。学部学科構成は旧来の学問分野にもとづくものではなく、問題領域に根ざしていることが望ましい、と。<sup>14</sup>

ここで興味深いのは、こうした全国規模の学術組織によるトップダウン形式の提言だけが、応用性や学際性を訴えていたわけではない。それは、1975年に公刊された学術論文でもバインダーが触れている点である。<sup>15</sup>

ソーシャル・エコロジーという学融合が生まれた背景には、大学を学問以外の領域における社会的要請や問題に反応するものへと変えていこうとする社会的あるいは知的な力が働いていた。大学が都心部の社会的弱者に感受性を持つ事で、人間福祉（human service）のカリキュラムが誕生した。それが汚染や資源枯渇などの環境劣化ならば、環境学のカリキュラムとして展開した。ソーシャル・エコロジーに関しては、これらがお互いに無関係なのではなく、むしろ両方の特徴を備える形で出来てきたのである。

この時代にはヴェトナム戦争が展開していた点も関連している。1963年にリンドン・ジョンソンが大統領となった時、ヴェトナムには15000人以下の兵士しかいなかった。しかし、1966年までにその数は50万人を越えていた。毎年戦争が激化するにつれて、徴兵される若者の数も増えた。すると、徴兵通知を燃やしたり、カナダに脱出したり、良心的徴兵忌避を

---

14 Ernest R. Hilgard, *A Prospectus for a Graduate School of Applied Behavioral Science*. Selected Documents in Psychology. No. 247. Washington, D.C.: American Psychological Association, 1972.

15 Arnold Binder, Daniel Stokols, and Randolph Catalano, "Social Ecology: An Emerging Multidiscipline" *Journal of Environmental Education* 7 (1975).

行なうなどの反対運動が展開した。1969年にマイライで600名のヴェトナム市民が虐殺された事が報道されると、反戦運動は激しさを増した。戦死者の数も増加し、戦争終結までに57000人のアメリカ兵が命を落とした。上記のBASS報告書にもある通り、戦争の存在は、社会問題に対処するよう科学に求める潮流と関ったのである。

1960年代の時代精神が学術的世界にどのように影響したかについては、いくつかの具体的制度化を例に考えてみよう。1966年、ウィスコンシン大学グリーンベイ校(University of Wisconsin, Green Bay)では、大学教育に地域共同体を絡ませる計画が始まった。エドワード・W・ワイドナー初代学長によれば、<sup>16</sup>

UWGBの計画は、地域共同体との絶え間ない連携を必要としている。この点を強調するに当り、WGBは「コミュニヴァーシティー(communiversity)」と自称する事とした。大学の教室は、単にキャンパス内の建物に限られていない。むしろ、学生も教官も共同体の中で研究し、観察し、働くのである。そして、共同体の構成員は、教室を訪れ、学生や教官と交流する。町と大学との間に隔たりは無いのだ。大学教育は、実際の環境問題に直結する問題解決と意思決定に関するのである。

つぎにコーネル大学人間生態学部(Cornell University, College of Human Ecology)が、1969年に家政学部(College of Home Economics)を改組して創設された。新しい学部は、人間の命、人間関係、地域共同体を改善していく目的で教育研究を進めていくことを基調にした。「本学部の使命は、すべての教育研究において、人間の状況を考察する事を基盤としている。」<sup>17</sup>

またエヴァーグリーン州立大学は、1967年に設立許可が下り、1971年に開学したのであるが、「米国史上、社会的に知的に最も激動する時代の

---

16 Edward W. Weidner, *Environmental Education at Post Secondary Level: The Training of Generalists and Specialists. Centre for Educational Research and Innovation. Organisation for Economic Cooperation and Development*, 1974, p. 189.

17 [http://www.human.cornell.edu/about\\_college.cfm](http://www.human.cornell.edu/about_college.cfm) を参照。

只中にあった」。そして「実際の世界」における問題に、教育原理をどのように当てはめていかに邁進する、というものであった。<sup>18</sup>

さらに「共同体に根ざした研究」(Community Based Research) と呼ばれるものが発展した。これは「共同体構成員についてではなく、彼らと共に、彼らのために行なわれる研究」である。「地域共同体で起こっている重要な問題について、これを解決する目的で、学生、教官、共同体構成員が協力するのが CBR である。」<sup>19</sup>

### III

ここまで PSE を創設する上で、いかなる個人的な理由と社会的要因が考えられるのか、を考察してきたわけだが、そもそも「ソーシャル・エコロジー (social ecology: SE)」なる表現は、1960 年代に何を意味していたのだろうか。それは、多くの研究者にとって、シカゴ大学のパーク、バージェス、マッケンジーによって創設された「ヒューマン・エコロジー (human ecology: HE)」と称せられる社会学の一派として捉えられていた。1920 年代初頭にはじまった HE の研究は、続く 1930 年代から 40 年代にかけて、批判されるようになった。<sup>20</sup> そして、1938 年には、アリハンが HE 研究の全体像を整理した上で、問題点を列挙した。いわく HE は「現在のアメリカにおける社会学で最も影響力の強い学派のひとつである」と。<sup>21</sup> 続く 1950 年代から 60 年代にかけて発表された SE に関する論評は、1973 年にウィットマンが包括的に整理した上で、これらをまとめて出版している。そこで SE は社会学の一部として位置づけられ、とくに HE、都市生態学、政治生態学、生態学的精神医学の分野に貢献してきた、と評価されている。<sup>22</sup>

また、心理学者のエメリーとトリストによれば、SE は社会的予測を立てる際に役立つ枠組みとして捉えられた。様々な人間社会とそれらを取り

18 <http://www.evergreen.edu/policies/p-longrange.htm> を参照。

19 Kerry Strand, et al. *Community-Based Research and Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass, 2003, p. xx.

20 Amos Hawley, "Ecology and Human Ecology" *Social Forces* 22 (1944).

21 Milla Alihan, *Social Ecology: A Critical Analysis*. New York: Cooper Square Publishers, 1964.

22 James Wittman, Jr. ed. *Selected Articles in Social Ecology*. New York: MSS Information Corporation, 1973.

巻く環境との間の関係を読み解き、さらには長時間にわたって適応が行なわれる複雑な過程を明らかにするもの、と定義された。社会心理学者であった彼らは、HEや他の社会学との関連性を匂わせる事はなかった。<sup>23</sup>

さらに、心理学とSEとの関連性を示唆しているのは、1974年にムースとインセルが出版した論文集である。1960年代から70年代にかけて執筆された学術論文を整理したものだが、当時の環境破壊に触れた後、本の序文で以下のように述べている。「環境についての関心から、新しい学問領域が生まれた。このソーシャル・エコロジーは、環境に関する社会と物質の両側面に注目した、新しい視点を提供するものであった。」そして「ソーシャル・エコロジーは学際的な研究を行なうものであり、そこでは人間に対して物質的・社会的環境がいかなる影響を及ぼすのかを考察するものである」と。これら心理学研究の問題は、一方で環境を、他方で人間の反応あるいは行動を記述しつつも、これらを十分に統合できていない、という点にあった。たとえば、刺激と反応の関係を定説化したスキナーに基づいて人間の行動は環境からの働きかけに対する反応だ、とする論調が散見され、そこでは月の満ち欠けが自殺や殺人に結びつく、といった諸説が並べられていた。<sup>24</sup>

こうした社会学や心理学におけるエコロジーとは対照的に、ソーシャル・エコロジーについて構造的な社会批判を世に問うていたのが、ムレイ・ブクチンであろう。彼がSEについて初めてまとめたのは、1964年のことであった。彼の主張は、やや辞書的な表現を借りれば、エコロジー思想の一類型であり、人間社会内に存在するあらゆる不平等と環境破壊との間の関連性を認識し、その問題意識の上で、環境保全型社会へ向けて、社会変革を重視する立場である、とまとめられよう。<sup>25</sup>

さて、このような歴史的な文脈の中で、アーノルド・バインダーは1969年、

23 F. E. Emery and E. L. Trist, *Towards a Social Ecology: Contextual Appreciation of the Future in the Present*. London: Plenum Press, 1973.

24 Rudolf Moos and Paul Insel, eds. *Issues in Social Ecology: Human Milieus*. 1974, p. ix.

25 Murray Bookchin, "Ecology and Evolutionary Thought" [http://dwardmac.pitzer.edu/Anarchist\\_Archives/bookchin/ecologyandrev.html](http://dwardmac.pitzer.edu/Anarchist_Archives/bookchin/ecologyandrev.html) を参照。ソーシャル・エコロジーとムレイ・ブクチンとの関連を1960年代の文脈に位置づけようとした試みとして、拙稿「ソーシャル・エコロジーとムレイ・ブクチン 1960年代のアナキスト」『上智大学外国語学部紀要』42 (2007) も参照。

自らが所属する社会科学部のジェームス・マーチ学部長に、社会的問題の解決を目的とした学融合的プログラムの創設を提案した。が、学部長の反応は芳しくなかった。しかし、オールドリッジ学長に対して同様の提案を行なったことで、自体は進展する。社会科学部内に新しいプログラムを開設することが難しい状況であったため、いずれの学部にも属さない形で準備作業が進められた。大学評議会にある学部間カリキュラム協議会に対して「応用生命科学と現代地域問題に関する学部間カリキュラム提案書」が提出された。<sup>26</sup>

本報告書で強調された点は以下の8つである。第一に、社会問題に対応する。第二に、学際的な教員が実際の問題に対応する研究をする一方で、理論構築という学術的伝統も保持する。第三に、学生はまず実際の社会問題に関するエコロジカルな視点を身につけるための授業を履修する。第四に、複数の学部にまたがる履修を行なうことが望まれる。第五に、全員が学期末小論文を提出するフィールド・スタディに参加する。第六に、教員、学生、地域の社会組織に属する構成員が協力して、フィールド・スタディの場所を決定する。第七に、キャンパス内の理論教育とキャンパス外の実践教育の融合を目指す。第八に、応用と地域経験を強調する一方で、カリフォルニア大学が大事にしてきた教育的伝統を保持する。この提案書は、その後、教育政策委員会、計画予算委員会、学部間カリキュラム協議会の審議を経て、大学評議会の本会議で1969年11月5日に条件付で可決された。その条件とは、応用生命科学という新カリキュラムの名称が応用生物学を連想させるので、改訂すべきとのものであった。バインダーによれば、教員と学生とのカジュアルな集会で、誰ともなく提案された「ソーシャル・エコロジー」という名称が代案として選択されたのだ、という。<sup>27</sup>

1969年12月4日、学務担当のラッセル副学長からバインダーに宛てた書簡において、正式にSEP創設が認められ、12月9日の書簡に明らかにされたように、SEPの初年度予算が300ドルとなった。こうして1970年1月の冬学期に開設されたSEPにおける提供科目は、巻末の科目表にも

26 Arnold Binder, "A Proposal for an Interschool Curriculum in Applied Life Sciences and Contemporary Problems 1969. Box 3 Folder 13, DSPC.

27 Samuel McCulloch, *Oral Histories*, "Arnold Binder" 21 April 1989, pp. 19-20, Box 2, Folder 4, DSPC.

あるとおり、エコロジー問題、カウンセリング、個別指導そしてフィールドワークと、きわめて限られていた。しかし、ここで注意すべきは、学外活動の出先の多様性である。項目別に列挙するだけでも、社会環境、臨床心理、物質環境、都市問題、健康と娯楽、社会少数集団、犯罪と正義、教育政策と組織と様々である。さらに、同年 4 月から始まった春学期には 5 つの授業が新たに提供されるようになった。行動科学、環境工学、公共政策学、低所得者用住宅、地域開発といった横断的学問領域がみとれる。そして、同年 9 月に始まる新年度である秋学期には 16 科目が追加提供されていることに留意したい。コンピュータ、マスコミュニケーション、家族社会学、セラピー、発達・児童心理学、麻薬問題など、当時のアメリカ社会が抱える多様な社会問題を人間を取り巻く環境と捉えて、これらを包括的に問題解決していこうとする姿勢がカリキュラムに見て取る事ができよう。<sup>28</sup>

#### IV

SEP がカリフォルニア大学アーバイン校で設立された年、化学者バリー・コモナーは『サタデー・レビュー』誌に「突如として立ち現れた環境に対する公的関心は、多くの人にとって驚くべきものであった」と述べ、ゴミ、大気汚染、水質汚染、騒音公害など多くの社会問題が長年に渡って存在してきたものの、その度合いがこれまでにないほど悪化していることを指摘した。その上で、「環境汚染への対応策が強く求められていることは明らかだが、この環境運動がどのようにして形成されたのか、はたまたどこへ行こうとしているのか、まったく明らかでない」と疑問を呈している。本稿はまさにこの課題を中心に据えて、1960 年代から高まってきた種々の社会問題、すなわち人種・民族性やジェンダーに基づく差別、ベトナム戦争などと環境運動との間に、関係性を認めようとしてきたのである。事実、コモナーは、1960 年代までに展開していた様々な社会運動、たとえば科学者の社会的責任、消費者保護、若者が希求する新しい生活様式、産業界

28 Russell Riley, "A Letter to Dean Kimball Romney Regarding Program in Social Ecology" 5 December 1969, Box 3, Folder 14, DSPC; "Program in Social Ecology: Course Offerings, 1970" Box 4, Folder 7, 155-25-2, DSPC.

の内省、都心部におけるゲッター化とドーナツ現象、反戦運動、ニューレフトなどが、合流して1970年の全米キャンパスで展開した環境ティーチインにつながったのではないかと推測している。<sup>29</sup>

研究史を振り返ると、このような社会問題や運動を研究してきた歴史家は、主に社会史の専門家が大半を占めていた。それに対して、自然や景観の保護、資源の効率的利用、公害など環境問題や運動を研究してきた歴史家は、主に環境史の分野に属していた。あたかも、それぞれの運動の間に存在する大きな溝がそのまま研究者の間の溝になっているかの様相を呈していた、と結論づけても過言ではあるまい。その意味において、本稿は専門化・細分化が進行する歴史学研究において、総合的・横断的な研究課題を提示したことにもなる。<sup>30</sup>

また、いわゆる「ソーシャル・エコロジー」とSEP創設の関係を考察してみたところ、コミュニティ心理学、都市計画学、環境の質と衛生、人間生態学、犯罪正義、教育政策と制度と極めて多岐に渡る社会問題との関連性が認められた。すなわち、これはエコロジーという言葉から連想される狭義の自然保護ではなく、「ソーシャル」という修飾語からもわかるとおり、広義の社会問題を人間をとりまく環境と捉えて、包括的問題解決を目指した、総合的・横断的試みである事が明らかになった。

29 Barry Commoner, "Beyond the Teach-In" *Saturday Review* 4 April 1970, qtd. in *American Environmentalism: Readings in Conservation History*, Third Edition, ed. Roderick Nash, New York: McGraw-Hill, 1990, p. 206. 第二次大戦後に環境運動が盛んになった理由として、Barry Commoner, *The Closing Circle*. New York, 1971 は過剰な資本主義; Samuel Hays, *Beauty, Health, and Permanence*. New York, 1987 は戦後の消費者文化; Donald Worster, *Nature's Economy*. New York, 1994 はエコロジーの考えが一般化したことを挙げた。これとは対照的に、社会正義 (social justice) を語る事で新しい環境史のナラティブを構築しようとする試みがある。Robert Gottlieb, *Forcing the Spring*. Washington, D.C., 1993; Laura Pulido, *Environmentalism and Economic Justice*. Tucson, 1996.

30 社会史と環境史の分断を問題視する論考は、ここ10年ほどで着実に増えている。たとえば、Alan Taylor, "Unnatural Inequalities: Social and Environmental Histories" *Environmental History* 1 (1996) は「環境に気を配り、社会的感受性をもったアプローチ」(p.1)の必要性を説いている。Ted Steinberg, "Down to Earth: Nature, Agency, and Power in History" *American Historical Review* 107 (2002); Stephen Mosley, "Common Ground: Integrating Social and Environmental History" *Journal of Social History* 39 (2005) も参照。なお、環境史研究全体の研究動向と残された課題については、拙稿「アメリカ環境史の回顧と展望」『西洋史学』224 (2007) を参照。



1970年にカリフォルニア大学でソーシャル・エコロジー・プログラム(SEP)が1名の専任教員と20名の学部生で出発した歴史的文脈に迫ることは、60年代に展開した諸運動の「越境」関係を考察することを意味した。そもそも1970年は、包括的環境保護制度がニクソン保守政権下で成立する一方、第一回アースデーに約2000万人が参加するなど、歴史の転換点に当たる。これらの出来事は、既述のとおり、従来の1960年代研究がほとんど分析せず、他方で環境史家は19世紀後半から20世紀半ばに展開した自然保護や資源保全に注目するか、あるいは第二次大戦後の新しい環境思想や運動を60年代という文脈で理解しようとしてこなかった。しかし、従来は個々別々に認識されてきた公民権運動、女性運動、反戦運動、新左翼運動などと環境は関連性が皆無なのだろうか。この関連性を考える上で、SEPは何かの指針を与えてくれるのではないだろうか、と本稿は問題提起したのである。

## 注

\*本稿は「科学研究費補助金 基盤研究(A) 1960年代の米国における文化変容とその越境に関する総合的研究」の成果の一部である。

SEP 創設一年目の提供科目一覧

	Winter 1970	Spring 1970	Fall 1970
SE 110	Communication of Problems in Ecology [Prof. Binder]	Communication of Problems in Ecology	Communication of Problems in Ecology
SE 125	Counseling Theories and Techniques [Little]	Counseling Theories and Techniques	Counseling Theories and Techniques
SE 119-189	Field Study * [Binder]	Field Study	Field Study
SE 199	Individual Study [Binder]	Individual Study	Individual Study
SE 120		Behavioral Modification [Whalen]	Behavioral Modification
SE 122		Air Environment [Russell]	Air Environment
SE 143		Public Policy in Action [Fagin]	Public Policy in Action
SE 127		Disorders of Behavior [McGuire]	Disorders of Behavior
SE 141		Housing for Low-income Families [Kraemer]	Housing for Low-income Families
SE 147		Community Development [Burela]	Community Development
SE 100A			General Seminar [Binder]
SE 103			Social Implications of Computing [Gordon]
SE 112			The Role of Mass Communication [Desenberg]
SE 114A			Social Evolution of Family [Monsen]
SE 115			Survey of Clinical Psychology [Burns]
SE 123A			Psychotherapeutic Techniques [staff]
SE 125A			Methods of Counseling [Miller]
SE 126A			Ombudsmanry Counseling [Miller]
SE 128A			Behavioral Theory within Children [Whalen]
SE 131			Air Pollution [staff]
SE 135			Dynamics of Human Population [Wong]
SE 141A			Barro-ology [staff]
SE 153			Drug Use in America [Binder]
SE 181			Behavior of Children [Wynne]
SE 185			Creative Learning in Children [Butler]
SE 187A			Educational Institutions [Moody]

\* Social environment; Counseling and behavior; Physical environment; Urban crisis; Health and leisure; Special minorities; Criminal justice; Educ. policy and institute